

失語症者の談話と固有名詞の理解

第 1 章 序論

1.1 目的

失語症とは、聞く、話す、読む、書くなどのほとんどの意思伝達モダリティーが脳損傷の結果、障害されて生じる中枢性の言語障害である。その症状の内容や重症度は多岐にわたり、失語症のタイプも損傷部位の違いなどに応じて細かい分類がされている。

このような失語症に対する研究やリハビリテーションがわが国で本格的に開始されてから、すでに 30 年近くが経過した。この間、CT や MRI などの画像技術の発達と普及にともない、失語症などの高次脳機能障害を主たる研究分野とする失語症学や、神経心理学が大きく発展した。また、失語症者への評価やリハビリテーションを担う言語聴覚士の養成も行われてきた。

失語症に必発する症状のひとつに、聴覚的および視覚的に提示された言語素材への理解障害がある。従来の失語症者の理解力は、得られた結果に一般性をもたらすべく、ある単語が置かれている文脈情報や、失語症者のもつ経験などを極力排して検討されてきた。具体的には一般名詞や短文を、特定の状況から孤立させた検討がほとんどであった。また、それらの分析も文法的な観点からのものが多かった。

ところで、失語症へのリハビリテーションの基本は身体障害のそれと同様、残されている能力を活用して、障害された能力を補うことである。そのためには、残されている能力がはば広く調べられる必要がある。し

かし、いまだ検討の及んでいない領域も数多く残されている。

失語症者の大半は、もとのレベルまでの機能回復は望めず、障害をもったまま日常生活をおくらざるを得ない。そのため、失語症者が日常場面で遭遇、または必要とする言語素材の処理能力の分析や、その支援方法の開発などは、リハビリテーションを担う我々言語聴覚士に課せられた第一の使命である。しかし、日常生活につながる研究や支援方法の開発は、今までなおざりにされがちで、報告は極めて乏しかった。日常での状況をよりの確に捉え、支援しようという実用主義的アプローチも提唱されているが、具体的な研究成果は少ない。

失語症の重症度により抱える問題の質は異なるが、筆者は特に以下の2つの領域が、失語症者の理解障害の研究からもれてきたと考えてきた。まず、軽度失語症者の談話の理解である。日常では単語や短文の意味が、それ自体独立して機能することはまれで、ほとんどは特定の文脈のなかで意味が限定される。また、日常の多くの情報は談話の中で伝達される。しかし、実用主義的観点があまり重視されない傾向の中、談話の理解は世界的にもわずかしこ検討されてこなかった。さらに、数少ない談話研究の中でも、日常場面で使われている談話そのものを、理解の素材とした研究はまったく行われてこなかった。このため、短文の理解がほぼ可能となった軽度失語症者にとって、日常の談話がどの程度理解できるのかなどは推測も困難だった。

本論文の前半は実用的アプローチの観点から、日常よく聞くラジオニュースや長時間談話などの素材を、無修正またはそれに近い形で与え、その理解力を検討するものである。さらに談話を連続提示し、それらの理解と把持のモデルを構築しつつ、考察するものである。連続談話の理解や把持に関する研究やモデルなどは、健常者対象の研究でも前例がな

いと思われる。

失語症の最重度のタイプは全失語と呼ばれる。口頭や書字による意志伝達能力の喪失のほか、「お年は?」、「痛いですか?」などの簡単な質問の理解もできなくなることが多い。従来、全失語の理解力の評価や訓練には、高頻度で具体的な一般名詞が使われてきた。これはそれらの語が、もっとも理解しやすい語彙カテゴリーであるという“常識”があったからである。ところが、別種の語彙カテゴリーに属する語がよりよく理解されるという報告が現れてきた。もっとも注目すべきは地名などの固有名詞の理解である。

われわれ自身は姓名、住所、本籍など公的に認知された固有名詞を与えられることによって、社会的に存在する。家族や知人、会社、所有物なども、ある固有名詞を互いに共有することで、その対象に関する情報交換が可能となる。従って、これらの固有名詞が理解できるか否かは、一般名詞や短文の理解に障害を示す全失語や重度失語症者の日常生活にとって、きわめて重要である。しかしながら、失語症学や神経心理学では、軽度失語症者の固有名詞の想起障害が時に報告されるのみで、全失語や重度失語症者の固有名詞の理解に関する研究はほとんどなかった。また固有名詞の下位カテゴリー、例えば地名と人名の理解度の比較、聴理解や読解などの理解モダリティーの比較などは行なわれていなかった。重度の失語症を扱った最近の検査や教科書でも、固有名詞に関する記載はほとんど無い。

本論文後半では、全失語群における、一般名詞、地名、人名の理解実験を行い、それらの理解を比較する。さらに、固有名詞の言語学的特殊性、人名の想起障害、人名に関係する脳部位などを包括的に説明すべく、人名の神経心理学的脳内処理モデルを提案することを目的とする。

Sanfordら1988は、固有名詞は談話の焦点を決める重要なコントローラーであると述べている。通常、談話の始めには、あるテーマを固有名詞で指定してから、談話が展開することが多い。例えば、「中国上海への日本企業進出」などである。全失語症者の場合、談話中の固有名詞が理解できれば、その談話を概要的に理解できる可能性もある。本論文で提示する談話と固有名詞の理解モデルは、将来それらの臨床的支援の基礎的論拠になるものと考えている。

また、高齢化に伴い、健常者でも談話内容の記銘力や、固有名詞の想起力は低下する。従って、談話と固有名詞の研究は失語症者のみならず、健常者の認知活動の一端を明らかにする上でも重要であろう。

本章第2節では失語症者の一般的な理解力障害について述べる、第3節では実用主義的アプローチを紹介し、筆者の立場をこのアプローチと比較する。第2章の軽度失語症者の談話の聴覚的理解では、無修正のラジオニュースを使い、その理解力を実験する。次に連続してラジオニュースを聞いた場合の理解力を実験し、軽度失語症者群、失語症者と年代の一致する健常者群、健常者若年群の成績差を検討する。そして、これらの結果から、連続談話聴取における理解と把持の関係についてのモデルを提案する。さらに、30分という長時間の談話の実験を行い、このモデルを検証する。

第3章では全失語や重度失語症者の固有名詞の理解力を扱う。筆者のおこなった実験、固有名詞の言語学的位置、認知/神経心理学的な検討、健常者の人名の想起困難などから、これらを包括的に説明すべく人名の脳内処理に関する神経心理学的モデルを提案する。さらに、自伝記憶は保たれたが、意味記憶が傷害された症例を紹介し、人名と地名、意味記憶、自伝記憶の関係について総合的に考察する。

第4章では、本研究の総括を行うとともに、談話と固有名詞の研究の臨床的な意義について述べる。

1.2 失語症者の理解力に関わる一般的な要因

失語症者の聴覚的理解力は、話す能力よりも保たれていることが多い。この点は健常者でも同様で、同じ内容を書いたり話したりするよりも、聞いて理解するほうが通常は良好である。しかし、精査をすればほとんどの失語症者は、聴覚提示された言語素材の理解にあきらかな障害を持っている。この聴覚的な理解障害は複雑で、例えば素材の長さ、文法的な複雑さ、話される速度などの要因が影響を与えている。現在までこれら理解障害の研究は多数存在するが、ほとんどは一般名詞や短文を用いて検討されてきたものである。本節は、現在一般的に認められている要因を項目別に列挙するものである（Chapey、1981 参照）。

1. 文法的複雑さ

長さの要因よりも、文法的な複雑さが文の理解により影響を与える。Goodglass ら(1979)の実験でも、長くて単純な構造の文は、短くて文法的に複雑な文より良好に理解されている。その他、肯定文は否定文より理解される、能動文は受動態の文より理解される、可逆文や埋め込み文はより理解が困難であるなどは失語症者に共通した要因である。ブローカ失語の理解は、他の失語症タイプに比較して、文法的な要因の影響を受けやすいとする報告が多い。

2. 経験的知識

経験的な知識が生かせる文は、そうでない文よりも理解される。例えば、「警官が泥棒を逮捕した」という現実的な場面を表す文のほうが、「泥棒が警官を追いかけた」という文より理解される。冗長性が増せば、より理解できる可能性もある。例えば、「泥棒を探していた警官が、お金を盗

んでいた泥棒を逮捕した」などの文である。

一方、経験的な知識の介入を徹底して排したテストとして Token テストがある。これは、色、大きさ、形の異なるチップを、「大きな三角を小さな緑の四角の横に置いてください」などの指示に従って、操作するものである。このように冗長性がなく、経験が活かさない文の理解に失語症者は最も困難を見せる。

3. 素材の連続と長さ

無関係な単語（例えば、名詞）を連続して提示し、それらを記銘するよう求めると、中度の失語症者は2または3個程度の単語しか記銘できない。これは、単語把持力（スパン）の低下と呼ばれる。一方、文の長さは、文法的な複雑さが同じならば、長い文より短い文がより理解される。長さが同じ文ならば、含まれる重要語の数が少ない文ほど理解される。

4. 時間的な要因

多くの研究で、ゆっくり話されたほうが、理解を向上させることが明らかにされている。これは、意味の分析や統合に、より時間を要すからである。同様に、文節間などに、間を挿入すると理解が向上する。間を空けることで、それまでの内容が整理できるからである。ただし、間を空けすぎると、直前の項目を忘れてしまうことがある。理解の保続という現象もある。これは、ある素材を聞き続けているうち、一定の処理能力を超えると、新しい素材の受け付けができなくなる現象である。発症後の間もない時期によく見られる。

5. 聴覚的認知の障害

周囲に雑音があると、素材への集中が困難になり、理解が低下する。また、聴覚的な注意力の立ち上がりに時間を要し、話された文の始めを聞き落とすことがある。さらに、語音弁別の障害もある。これは、入力さ

れた言語素材が、正しく聴覚的に認知できないことである。例えば、「時計」に対して、「エ？なんと言いました？ トダナ？ですか？ トイレ？ですか？」などと聞き返すことである。「たまご」と「たばこ」のような似通った音形同士の弁別も難しい。これらは、ウェルニッケ失語によく伴う症状である。

6. 語彙の意味理解の障害

理解できる語彙の減少、または語彙の意味を支える階層構造が不安定になっているために起こる。やや重度の失語症では、聞いた単語を復唱できてもその意味が理解できないときがある。例えば、「時計」と復唱できても、「時計を指してください」というと、「時計って何でしたっけ？」のような反応をする。

理解の評価や訓練の方法として、複数の物品やカードを並べ、その中のものの名前を言って、指差しを求めることがよくある。この場合、選択肢の数が多いと指差しの正答率が不良となる、また、選択肢同士が意味的に関連していると、同じく正答率が低下する。これも語彙の意味を支える階層構造の不安定性に由来する。

7. 特定カテゴリーの障害と保存

どのような語彙カテゴリーの語の理解が難しいかに関しては、一般的には、色名、身体部位名、指の名前、左右や方向を表す語などが難しくとされる。その理由として、それぞれのカテゴリー内の単語が、互いに意味的に近いからである。通常、使用頻度が高い語彙は、少ない語彙よりも理解しやすい。また、抽象語は具象語よりも理解が難しい。

しかし、失語症者の中には、特定のカテゴリーに属する単語の理解のみが障害される、または保たれる症例がいる(Yamadori & Albert, 1973; Gentilini et al., 1988)。例えば、Warrington と McCarthy (1983)の全

失語症者は、食物と動物名が選択的に保たれていたが、物品名の理解などができなかった。時に、抽象的な単語のほうが、具体的な単語よりも理解される場合もある。文法的カテゴリーが異なる語彙同士、例えば名詞と動詞のようにどちらかが障害されることも観察されている。

これらの臨床結果は語彙全般の意味システムが語義や文法的カテゴリーにより体系づけられていることを示唆している(Miozzo et al., 1994; Forde & Humphreys, 1999, 参照)。固有名詞も一般名詞とは異なる特殊なカテゴリーであることがわかってきた。

1.3 実用主義的アプローチと筆者の立場

失語症者は聴覚的理解、文字理解、発語、書字など言語に関連する広範囲な活動の障害を呈す。このため、これらの障害の基盤となっている構造を、失語症者間で比較し、また各症例の継時的変化を包括的に捕らえるために、SLTAなどの標準的な失語症検査が開発された。そのため、これらの検査は標準性や再現性を得るため、記号としての言語の操作能力を、他の要因をできるだけ除いた形で調べている。

一方、失語症者の理解力は、自然な場面の中で関連する文脈が与えられたときに、より良いものになることが知られている。失語症者には、日常場面に付随する文脈の手がかり、状況についての経験的な知識、身振りや表情など非言語的な情報を利用する能力が残されていることが多いからである（本多, 1993）。その最大の理由として、Pala-linguisticな処理をおこなう右半球が、正常に機能していることが挙げられよう。

失語症者は言語やシンボルの理解に困難を示すが、それらは文脈を排除されて提示されたとき、よりその困難度が増す。従って、標準的な失語症検査の成績と、実生活におけるコミュニケーション能力の相違がしばしば指摘されてきた。このことは同時に、自然なコミュニケーションにみられる文脈を取り入れたほうが、文脈を減らした伝統的な検査よりも実践的な評価ができることを示唆する（Davis & Wilcox, 1981）。

形式文法を代表とする従来 of 言語学においては、文脈をできるだけ排し、孤立した単語や、文を分析対象としてきた。これに対して、語用論の分野では、社会的、認知的影響をも反映した現実の言語使用を対象とする。つまり、文脈の中における意味が重要な関心事になっている（本多, 1993）。

1978年 Wilcox と Davis は、標準的な失語症の理解力検査では不良だった症例に、ビデオで記録した話し手と聞き手の対話場面を見せた。そして、失語症者らにその中でやり取りさせた意味を判断させ、誤りが少なかったことを報告した。その後、Davis と Wilcox (1981) は、語用論の研究にもとづく PACE (Promoting Aphasics' Communicative Effectiveness) と呼ばれる自然な対話構造にもとづくアプローチを導入した。これは、自然な会話そのものではないが、日常会話の本質的な要素を応用したものである。アプローチの主要目的は対話者間の新情報の伝達におかれ、話し手と聞き手の役割交代を積極的に行わせる。具体的には、聞き手がわからない情報を、話し手は身振り、表情、描画など自由な伝達手段を選択して、伝達を試みるものである。これ以後、言語学の「語用論」を理論的な基盤とする実用的なアプローチや評価方法が少しずつではあるが、出てくるようになった。

1980年 Holland は、日常生活上の基本的なコミュニケーション活動を、生活場面のシュミレーションを用いることで評価する検査を作成した。この Communicative Abilities in Daily Living -A Test of Functional Communication for Aphasic Adults を、綿森ら(1987)は日本人向けに改訂し、実用コミュニケーション能力検査—CADL 検査として発表した。これは実際の生活用品や言語以外の状況を積極的に利用するもので、検査項目は薬を指示に従い飲む、自販機で切符を買う、ラジオの天気予報を聞くなどがある。採点は言語的に正確か否かではなく、情報が伝達できたかどうかで判断される。例えば、「今、具合の悪いところはどこですか」という質問に対し、自分の口を指し示した場合などは正答となる。

これらの検査に対して、Skinner ら (1984) は、シュミレーション場面でのロールプレイという方法からくる限界を指摘した。また、重度な

失語症者は参加できないことなども問題とした。このように、この検査は、主に中度の失語症者が適応の対象となっており、軽度と最重度の失語症者らには適応が困難な点が含まれている。軽度失語症者の中には、標準的な失語症検査では全問正答する程度に改善しても、社会生活上、あるいは職業復帰上、コミュニケーション障害を訴える症例がいる。しかし、このような症例に対する評価は、従来の標準的な失語症検査ではもちろん、上記 CADL 検査でも取り扱ってこなかった。なかでも、文脈の要因がもっとも加わる談話の理解は、その有効性が前節のように示唆されながらも、ごく簡単な検査項目があるだけだった。

そのため、失語症者の談話の理解は、2.1 節で紹介するように、個々の研究者によって、別個に検討されてきた。また、それらの研究者の多くは、談話の理解は日常の実用的な理解力の指標になるとみなしている。しかし、それらの研究で使われた談話は、やさしい読み物を音読したものを使っている。

一方、筆者は、現実に使われているニュースや談話を用いて評価をすれば、より軽度失語症者の実用的な談話の理解が推察できると考え実験を行ってきた。

最重度の失語症である全失語症者の理解力の評価は、単語がどの程度理解できるかが主な目的となる。Schuell(1961)は、使用頻度の異なる 4 種類の単語の聴覚的な理解を調べた。その結果、単語の使用頻度が低下すると成績も低下したため、単語の使用頻度は理解に関与する重要な要因であるとした。しかし、単語の使用頻度は、個々人の経験、職業、興味などの要因によって決定される。実用主義的には、失語症者個人にとって、明確に意味があり、関連がある言語素材を見つけ出すことが重要であろう。

CADL 検査を製作した Holland (1980) は日常実際に使用されているという前提で、利用できる言語素材のリストを提示している。そのなかには、食品のラベルやビルの看板などが含まれている。綿森ら (1987) も日本版 CADL 検査の中で、実用コミュニケーション中心の治療法は日常性を原則とし、名前など個人的に意味を持つ情報を素材に使うと良いとした。

ところで、ビルの看板の多くや名前などは、固有名詞である。日常では、知人、有名人、会社名や商品名など無数の固有名詞が存在する。上記の著者たちは、固有名詞の利用をすすめているが、CADL 検査では評価の対象にしなかった。また、一般名詞と比較しての固有名詞の独自性や、全失語症者にとってどの程度処理しやすいものかという考察なども行わなかった。標準的な失語症検査でも、固有名詞は検査項目からはずされてきた。

本論は、従来の CADL 検査の適応対象外だった軽度と最重度の失語症者に対し、彼らの日常生活上にとって、それぞれ重要な談話と固有名詞の理解に関するものである。